

令和5年度 第2回 介護福祉学科 教育課程編成委員会 報告書

日時：令和5年2月8日（木）10：30～12：00

場所：zoom形式

参加者名

委員 大久保 佳世（社会福祉法人はるび 特別養護老人ホームはるびの郷施設長）
委員 佐々木 幸 （社会福祉法人俗風会 認知症介護研究・研修東京センター客員研究員・
東京YMCA医療福祉専門学校非常勤講師）
教員 細野 真代 （介護福祉学科学科長）
教員 岡本 啓介 （介護福祉学科教員）
職員 星 朋美 （教務課係長）
職員 深澤 史 （教務課係長）
職員 鈴木 慶紀 （教務課）

議題：地域連携について考える

鈴木職員）

昨年12月に4年ぶりの認知症カフェを開催した。（当校では「MeMoカフェ」としている）しかし、上手く告知ができていなかった結果、コロナ禍以前の盛り上がりには欠けた印象で、参加者は少数に留まった。「地域」は、行政、施設、一般企業、学校に関わらず、なくてはならない存在であり、地域貢献の機能強化が学校の持続可能性を高めるポイントの1つである。そのため、地域連携をさらに向上させるための施策を考えていきたい。

細野教員）

以前から地域の方々に「何かできないか」を検討しているが、上手く集客することができていない。そのため、委員の方へご意見をお伺い、良い告知方法と新しい地域貢献の方法を発見していきたい。

①施設や地域の現状について

[各出席者からの意見]

大久保委員）

当施設が行っているカフェは、企業を含めた会員約100名いる地域の身守りネットワークである「秋津あんしんネット」と共催している「ふらっとカフェ」。これは認知症カフェであるが、子育て世代等、どなたでも参加できるものになっている。内容としては、個人・共同の制作とその展示会、参加者が趣味を披露する場、誕生日会を行い「自分を認めよう」場も提供している。

佐々木委員)

認知症に関係して地域支援を研究する立場からすると、地域包括支援センターでは、地域の方々向けにスマートフォンの使い方等、様々な企画を実施している。地域包括支援センターは、2005年に設置されたが、設立当初は知名度が低かった。しかし、よろず相談所のように地域の方々のニーズに答えていくことで、現在は、知名度も向上し地域のつながりを作る存在となってきた。そのため、学校はさまざまな活動を行うことと並行して、すでに地域包括支援センターがつくっている連携・協働にも参画することも良いだろう。そこで、お互いの成果や課題を共有しつつ、現在の地域連携・協働における課題や不足している点を補完するような取り組みを期待する。

②ニーズの調査と告知方法

[各出席者からの意見]

大久保委員)

「ふらっとカフェ」を実施してから約8年経つが、カフェをオープンする前は、まず、介護福祉士の知識・技術を知ってほしく、地域の方々の困り事を解決するボランティアから始めた。その結果、名前が広がって、地域のニーズを把握することができ、「ふらっとカフェ」をオープンすることができた。

佐々木委員)

介護は、利用者がその場において「心地良い」と感じてもらうことが重要なため、利用者のニーズに沿った対応が必要である。それを考えると認知症カフェを実施する際は、学生が場数を踏む場でもあるが、「企画を実施することが目的」ではなく、参加者に意見を求めて「ニーズを把握することが目的」だと考える。そのため、実施毎のアンケート等、検証を行う必要がある。まさに特別養護老人ホームはるびの郷様が行っていたような、種まきが必要となってくる。

質問として、12月に実施したMeMoカフェでは、地域の方々へのニーズを把握するための施策は行ったか。

細野教員)

前回のMeMoカフェでは、アンケートを含め、参加者との対話や反応から意見を頂戴し、ニーズを発見する取り組みを実施していなかったため、今後は検討していきたい。

また、告知方法について、コロナ禍前は、ポスティングをしたり、区報に掲載いただいたりしていたが、今回は、地域の掲示板にポスターを掲示したのみであったため、今後の参考として良い告知方法のご意見を伺いたい。

岡本教員)

告知が上手くいかないことに関して、学校という場合は、関係者以外入りづらいことや、当校の特徴でもあるが、どこか堅くなってしまう、カフェなのに講座だと捉えられてしま

うこともあり、知名度を上げることができていないのではないかと考える。そのため、民生委員の方々を巻き込んで検討することも必要になってくるであろう。

大久保委員)

告知方法については、ポスティングに加え、地域の身守りの活動の一部でもある自宅訪問で交流を図りながら、告知を行っている。また、ポスターは、堅苦しくない文言とし、取り組み内容を記載している。

③学校との連携に向けて

大久保委員)

施設が学校と連携を図ることについて、当施設では老人会で「認知症」「口腔ケア」等に関する講演を行うが、この実施前に「最新の教育の情報収集」の場として、先生方と当施設の職員が交流できる研修ができれば良い。そこで得た情報を基に講演を実施し、学校が「監修」のようになることを希望する。

他校様との例だと、当施設の園庭を活用し、農福連携を行う予定で、そこで利用者と学生との交流ができる場の整備をしている。

このような取り組みの中で、職員のスキルアップ、施設全体の底上げにつながるため、学校との連携は、施設としてもありがたい。また、学校が動く際は、豊島区の地域福祉計画に沿って活動することで、行政も協力できる可能性があるため、この検討もして良いと思われる。将来的には、学校、施設、地域包括支援センター、社会福祉協議会が共催して1つのものを地域に提供できることを期待する。

佐々木委員)

学校開催のイベントは、堅いイメージがある地域包括支援センターや社会福祉協議会のものとは異なり、今まで参加者が見せなかった表情や声が出る可能性がある。そこを行政と上手く棲み分けし、参加者の意見を学校が活かしたり、地域に共有できたりすると良い。

また地域の一般企業には中高年が勤務しているので、商工会と連携を図る等して、「介護保険教室や介護技術教室」を行い、企業との連携を図ることで、繋がりが深まるだろう。

細野教員)

コロナ禍前は、地域のミーティングを実施し学生との交流があったが、現在はなくなっている。そのため、学校として「何ができるか」を地域に伝えていく場がなくなったので、学校を知っていただく取り組みから始めることも検討する。

本日のご意見を基に、今後のMeMoカフェでは、地域の方々の声をニーズとして捉え、行政、施設と協力し展開することは、福祉の学校だからこそできる特徴であるため、活かしていきたい。

④今後の課題

大久保委員)

地域連携において、地域に尽くしてくれる民生委員等の代替わりと、コロナ禍でフェードアウトしてしまった方がいるため、人材が不足している。それに加えて地域の特徴でもあるが、農地から新興住宅となり、若い世代が多くなってきている。このような実態から、地域連携が希薄化になっているため、「次の世代とどう繋がっていくか」ということが課題である。

佐々木委員)

高田馬場の特色として、様々な留学生がいたり、外国籍の労働者がいたり、外国にルーツを持つ高齢者もいるかもしれない。その特徴を活かし、国際化の1つとして、「さすが福祉の学校の留学生」と思われるような企画も期待したい。

まとめ

- ・認知症カフェは「企画を実施することが目的」ではなく、参加者に意見を求めて「ニーズを把握することが目的」であるため、今後は、アンケートを含め、参加者との対話や反応の中から、ニーズを発見する取り組みを検討していく。
- ・告知方法として「MeMoカフェとは何か」を明記し、地域の民生委員と協力し宣伝していく。
- ・施設と学校との連携は、職員のスキルアップ、施設全体の底上げにもなり歓迎であるが、学校、施設、行政が1つのものを地域に提供できることを期待する。
- ・まずは、学校を知ってもらう取り組みを行い、福祉の学校だからこそできることを地域に伝え、良い連携につながる企画を検討する。

以上